

育児相談場面における母親の子どもに 対する否定感情の変化

村中由紀子 (教育心理学科)

Change of a Mother's Negative Feelings Toward Her Child in Childcare Consultation

Yukiko MURANAKA (Department of Educational Psychology)

抄録

育児上の困難感を抱えて育児相談に来談した幼稚園児の母親3名を対象に、相談面接を行う過程で、子どもの行動に対する捉え方の焦点づけを試み、それによる母親の気持ちの変化についての考察を行った。その結果、2回目の来談時には、母親の語りが否定傾向から容認傾向に、また状態説明においては、自己注目的から他者注目的へと視点の変化がみられ、同時に子どもの行動の改善が報告された。しかしこれらの結果を、相談面接の効果として結論付けるには、時間経過による自然解決の可能性や、焦点づけが一時的な誘導に過ぎなかったのではないかといた課題が残されている。今後、継続的かつ長期的な検討を重ねることで、育児相談を有効なサポートシステムとして発展させ、母と子の発達支援に貢献したい。

キー・ワード：育児相談, 育児の孤立化, 否定的感情, 焦点づけ, 発達支援

I 問題と目的

近年、母と子を取りまく社会文化的背景の変化と共に、母親の持つ本来の素朴で直感的な機能が徐々に変化して来ている⁴⁾。また、過剰な育児情報が、経験の少ない母親の育児不安を高め²⁾、さらに日本の地域社会に組み込まれていた育児サポートシステムが時代とともに失われるにつれ、育児の孤立化が徐々に進行し、かつてのように地域や家族などの、周囲の支援を受けながらの自然で温かな育児を行うことが難しくなって来ている。そして少子化・晩婚化・高齢化社会に生きる現代の母親は、かつての母親のような、多くの子どもを育て上げることで、短い人生を全うした時代には考えられなかった課題に直面することになった⁸⁾。東山(2006)は、これらのことについて、母性の根本的なところは非常に本能に近く、現代女性が個を確立するという生き方は本能とは拮抗するため、それが子どもに対して自然な感情を表出することを困難にし、心の乖離が起こっていると指摘し、現代文化は我が子に対する素朴な愛情の表出をも阻害するように働いているのかもしれない